

芸術の島、直島紀行

—官民協力を通じた地域共生プロジェクト、人生の中に植えた芸術'直島の奇跡'で第2の奇跡探し—

ファン・ウンジ（黄銀智）

1. 旅のはじめに

この3年余りの間、政治外交学科の授業で、私をはじめとする学部生たちに先生方が強調したのは、「共同のガバナンス」というような官民協力でした。それにもかかわらず、官民協力の概念は私にとってとても抽象的かつ理想的なものに過ぎなかったのです。

しかし最近、「日本と東アジア」という授業で、草の根民主主義に基づいて市民活動が活性化した日本の村共同体を学べたことにより、異常的な官民協力は果たして何かということについて考える機会がありました。私にとって官民協力というのは、「村共同体の一員としてお互いがお互いを必要として一緒に困難を乗り越える官民パートナーシップ」という「共生」の意味を持ちます。この延長線上で、私は日本の西南端にある香川県の直島を舞台に想定した、地域共生の成功事例に注目してみたいと考えました。

2. 直島の魅力 第一： 美しい自然景観

直島は瀬戸内海が一望できる風景が美しいところであり、最初に宮ノ浦港に入港して見た青い海と、草間彌生の赤いカボチャという作品が、一幅の絵を見ているような美しい景色でした。特に、ベネッセハウスをはじめとする様々な美術館が集まっている直島の南地区の海岸道路で見た絶景は素敵でした。私は自転車に乗りながら直島を見物したので、直島の自然を五感で感じられました。夕方、澄んだ海があかね色に染まった光景は、おそらく一生忘れられないでしょう。作品が、美術館という閉ざされた空間の中ではなく、埠頭に、道端に、そして砂浜の上に、直島の自然景観と一つになって調和しているのが、とても気に入りました。



3. 直島の魅力 第二： 素朴で細やかな本村地区の隠れた芸術

直島の本村地区は、「家プロジェクト」や安藤忠雄博物館のほかにも、こまやかな物や壁画が心に残るところでした。本村地区のいたるところで、糸を利用して壁に絵を描いたものを探してみる面白さがあったのはもちろん、住民らがそれぞれ自分の自宅玄関や塀などを、特色ある置物などで飾っていたこともやはり、注目すべき点でした。



私は、直島住民たちの命名センスにも感嘆せざるを得ませんでした。昼食を食べた「あいすなお」は有名な自然食カフェでしたが、店の名前がとても個性的だと思いました。「愛」と「素直」を合わせて「純粋な恋」と読むことも、そして「愛する直島」を減らして「愛す(あいす)」「直(なお)」と読むこともできるためです。二つの意味のどちらも、本当にきれいな名前だと思いました。この他にも、猫カフェの名前である「にゃお島」、日本語で湯を「ゆ」という点を活用した、お風呂屋の名前「アイラブユー」(I♥湯)など、名前からも感覚的な感じが出ていた直島に魅了されました。



4. 直島の魅力 第三： 有名な芸術家たちの足跡

1997年、本村地区で住んでいた住民が、住民センターに古い家屋を寄贈した後、有名な設置美術家と言われる宮島達男、ベネッセ・グループ、そして村の125世帯の住民が、その家を一つの美術作品に改造しました。「家プロジェクト」第1号となった「角屋」は、これほどまで芸術家と企業、そして島の住民が一体となって生み出され、「家プロジェクト」の開始になりました。カドヤの誕生に感銘を受けた建築家・安藤忠雄は、本村地区内の捨てられた寺の跡に残った古い建物を改造して、第2号の「南寺」を作りました。内部に設置された作品は、ジェームズ・タレルの「月の裏側」であり、完全な暗闇の中で次第に闇に慣れた人間の目に、かすかな光が感知されるように作られた作品です。生と死の瞬間に映し出される一筋の光は、生命と希望に対する人間の渴望を意味します。「家プロジェクト」は「1建物、1作品」という概念から始まって、計7軒の作品が完成させられました。このほかにも、安藤忠雄を紹介する空間である安藤ミュージアム、ベネッセ・美術館、李禹煥(イ・ウファン)美術館、地中美術館、そして草間彌生の赤いカボチャと黄色いカボチャなど、様々な有名な芸術家たちの作品が直島のいたるところにあります。

「家プロジェクト」に改造された7軒の家のうち、「歯医者」というところが特に印象的でした。昔実際に歯科医院に使われていた陰惨に見える古い建物内部を、一つの芸術作品に昇華させておいた上に、村の老人らが『家プロジェクト』に対する案内を引き受けているという点も記憶に残ります。「歯医者」を訪れる観光客らを迎えていたおじいさんは、作品に対する説明はもちろん、写真を撮ってくれるなど、案内員の仕事を楽しんでいました。

「家プロジェクト」をはじめとする芸術プロジェクトによる島の経済的効果を、金額に換算するのは難しいことだろうと考えました。廃墟のような島に多くの人たちが訪れ始め、失意に陥っていた40%ほどの高齢者たちが、案内員などの仕事を務め、活気を取り戻しています。1ヵ所だけであった民宿が30ヵ所以上に、そして2ヵ所だけであった食堂が10ヵ所以上に増えたということは、直島が文化芸術の発展だけでなく、地域の発展を成し遂げたということではないでしょうか？



5. 旅の終わりに

私にとって、韓国に適用可能な「第2の奇跡」というものは、無条件に何かを壊して新しいものを作るのではなく、自治体の単純な一回限りの行事の限界を超えるというものです。韓国も街の随所に歴史と文化が息づく空間に多様に変貌させ、現代と歴史の共存を図ることこそ、文化の融合時代にふさわしいことではないかと思います。そのためには、自分が住んでいる村と地域に対する愛情と自負心を持ち、様々な団体との連携を基にした住民協議体など、官や民の片方だけの努力ではなく、双方の協力を通じた活発な活動を展開していく必要があると思います。

直島は、私がいままで想像してきた歴史と伝統、そして文化芸術があちこちに息づく社会を作るための官民協力の姿そのものでした。ベネッセハウスをはじめとする美術館も、直島の美しい自然環境と調和していて感嘆しましたが、何よりも私の関心をさらったのは、島の人たちの自発的な努力と直島の発展に向けた意志でした。家の前に置かれている小道具一つ一つに、美的感覚と真心が込められていたのはもちろん、住民みんなが協力して直島を魅力あふれる島に整えていました。今回の直島旅行を通じて地域文化が世界的であり、逆に世界的文化が地域文化になれる可能性を、我々は直島の奇跡から見出すことができました。地域の伝統文化と融合した住民参加型芸術の場を通じて、誰でも自然と芸術を満喫できる直島の事例から、私は今後、韓国の歴史文化空間の創出に向けた第2の奇跡を想像することができました。